

資料

地域連携事業におけるフィールドワークの効果
-美浜町住民と看護大学生による減災と健康づくりの取り組み-
Brief Report :Effect of Fieldwork on Local Cooperation Project.

Project for Disaster Mitigation and Health Promotion by Residents in Mihama
Town and Nursing Students

河合 正成, 山崎 加代子, 池原 弘展,
家根 明子, 横山 浩誉, 交野 好子
敦賀市立看護大学

キーワード：災害，地域連携，フィールドワーク，健康づくり，看護大学生

I はじめに

わが国においては、戦後の復興から高度成長期を経て、産業が都市部に集中するとともに若者の都市への流入が一段と高まっていた。その結果、地域は第3次産業の都市部と第1次産業である農山漁村の二極化が生まれた。とりわけ現代の農山漁村地域では、少子高齢化とそれに伴う人口減少や、高齢者の身体機能の低下と健康障害をもった生活の場になっている。また、こうした地域では夫婦のみの世帯や一人暮らしも多く、地域社会を維持していく活動の低下等が生じている。

以上の点から、農山漁村地域における住民の健康ニーズは多様化し、医療、看護、福祉への期待が高まっているといえる。

こうした現状に対して、地域の活性化を図ろうとする動きは高まっている（内閣府地方創生推進事務局，n.d.；一般社団法人公立大学協会，n.d.）。特に、総務省において、「大学生や大学教員が地域の現場に入り、地域住民らとともに地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組むことで、地域の活性化へ寄与する」といったことを推奨している（総務省，n.d.）。

そこで本学では、人口減少と高齢化率の高い一地域である福井県美浜町A地区を対象にして、看護大学という本学の特色を活かした“災害から命を守る健康づくり”というテーマを掲げ、地域住民とともに地域の課題解決にむけて大学学生、教職員との協働で行う活動に着手した。

一方、敦賀市立看護大学は、中都市に設置され、かつ、地域医療に貢献することを教育目標の1つに掲げている。したがって、本学の教育においては、健康ニーズの高い地域をフィールドにした実践的教育は欠かせないテーマである。

今回、学生と住民が一体となって“災害から命を守る健康づくり”の事業を展開した

ので、その事業内容と教育効果について報告する。

II 活動目的と具体的方法

1. 活動の目的

美浜町は、海や河川、山々に囲まれた集落が点在している地域である。このため災害発生時に、避難を必要とする場合は、まず、①避難所に移動する過程において危険性がある。また、②避難所までの距離があり、高齢者は体力が持続するか否か疑問がある。③避難所での生活が始まった場合、健康的な面から適応できるか否か不安がある。さらに、④二次的な健康被害を受ける可能性があると考えた。そこで、これら災害時に想定される課題に対して、美浜町と大学学生、および教職員の活動を通して、住民が“災害から命を守る健康づくり”に主体的に取り組めるように支援することを目的にした。

2. 活動に関係する団体の概要

関係団体は、自治体である美浜町、本学の看護大学生である。また、活動を支援するために、大学教職員と役場、A地区自主防災会で美浜町プロジェクトチームを結成し、住民や学生の活動のための企画調整等を担った。

1) 美浜町

美浜町は、約3,700世帯（37集落）からなり、自治体の課題として高齢化率が高い（福井県：28.6%、美浜町：33.4%平成27年国勢調査）点にある（福井県，2017）。また、住民の生活環境としての同町は、北部にリアス式海岸が広がり、中部以南とその周辺部は急峻な山地に覆われた地形である。A地区の住民の居住地域は海側、山側と分断されてはいるが、ほぼ平地に住居をもって生活を営んでいる。また、同町は“健康で安全かつ安心な暮らし”を目指した“げんげん運動（減塩と減量を取り組む運動）”に取り組み、住民への健康づくりを推進している。

2) 看護大学生

本学は、敦賀市が設置する公立の看護大学である。嶺南地域唯一の高等教育機関として位置づけられている。表1に示す基本理念と教育目標をもとに教育課程が組まれている。このような地域に隣接する本大学では、教育の一環として地域を理解し、そこで生活する住民の健康に関するニーズを把握し、健康支援や疾病予防、在宅療養者の看護等が教育課程に組まれている。具体的には、応用看護分野として在宅看護学分野、救急・災害看護学分野、地域看護学分野の3分野の中から選択し、看護学を深く探究することができる。本活動に参加した学生は、応用看護分野である救急・災害看護学分野と在宅看護学分野を選択した学生である。

表1 本学の基本理念と教育目標

基本理念	教育目標
豊かな教養と総合的な判断力、高度な専門的知識と実践力を有する人材を育成するとともに、看護の発展に貢献できる質の高い研究に取り組むことを通して、人々の健康と福祉の向上に貢献できる大学を目指す。	学問への関心を持ち、豊かな教養を身につけ、自立した社会人として行動できる能力を育成する。
	人々の生命に対する畏敬と、生き方への尊敬の念を持って看護が提供できる豊かな人間性を育成する。
	高度な医療に対応できる専門的知識、技術、倫理観を身に付け、看護が実践できる能力を育成する。
	地域医療の充実と発展を自らの使命とし、他職種と協働して地域に貢献できる能力を育成する。
	専門職としての誇りを持ち、将来にわたり看護を発展させていくための自己研鑽能力と主体的研究能力を育成する。

3. 活動内容

本活動は、大学内で行う講義だけでなく学習の場を学外へ移し、地域と大学が連携し、災害に対する人間の“健康で安全かつ安心な暮らし”を考え実践する活動と位置づけ、本学の救急・災害看護学分野と在宅看護学分野の選択必須科目を受講する学生41名と担当教員7名が横断的に協力し取り組んだ。

活動の目的を踏まえ、各家庭への訪問により聞き取り調査を行いながら、住民個々の生活を振り返り、安心した暮らしを考える機会とした。また、健康教室を設け、健康生活への知識の提供にも取り組んだ。

このようにして、地域の防災力を高めるため、災害に備えて、健康づくりと日々の健康

生活を創造することを目指した。

4. 倫理的配慮

活動に際しては、学生と住民に内容を説明し同意を得て活動を行った。また、活動中の写真や報道機関への公開についても、学生と住民に事前に同意を得てから行った。学生や住民の意見等を公開するにあたっては、個人が特定できないよう配慮した。

Ⅲ 活動の実際と効果

1. 活動期間と概要

活動は、2019年4月から2020年2月末までの期間である。学生が住民と交流しながら行った活動は、①インタビューによる地域住民の健康状態、災害から命を守るための健康づくりの実際、災害発生時の対応、生活環境等の調査である。

そうした調査を基に、②住民に対する調査報告と意見交換会、③健康づくりのための健康教室の開催（歩幅を意識した生活）（足裏と足先を意識した健康生活）、④A地区自主防災会総合防災訓練への協力等である。主な活動の概要は表2に示した。

2. 活動内容とその効果

地域住民の健康状態の把握、地区踏査、開催した報告会や健康教室、A地区自主防災会総合防災訓練へ参加した学生たちの気づきや感想から、学習した内容、経験等について述べる。また、学生と交流した住民の感想も記述した。結果は表3に示した通りである。

なお、学生や住民の言葉は「」、学生の学習内容については〈〉、住民への影響は《》で表した。

1) インタビューによる地域住民の健康状態の把握および地区踏査

災害への備えの有無や準備状況、住民の健康状態、生活環境に関する調査は延べ3日間行った。

調査にあたっては、学生は2人1組となり、

表 2 主な活動の概要

活動	実施日	活動内容	参加数	
			学生	住民
住民の健康状態の把握	7月中の 3日間	・ 災害への備え, 災害への準備, 住民の健康状態, 世帯構成など生活環境の聞き取り	約40名	105世帯
地区踏査		・ 災害発生時に危険が伴う場所の調査		
			・ 避難時に注意が必要な場所や危険箇所の環境地図の作成 (学内)	24名
調査報告と意見交換会	調査後7月 下旬に 2回開催	・ 避難時影響を与える住民の健康状態 (体調, 持病, 歩行する力, 避難する力等) の実態を報告 ・ 災害時に連絡を取り合う方法の説明 ・ 環境地図を掲示し避難時の危険箇所を説明	昼間 21名 夜間 7名	昼間 9名 夜間 13名
健康教室 [歩幅を意識した生活]	8月	・ 歩幅の測定と分析 ・ 歩幅のとり方の説明と体験	3名	24名
A地区自主防災会総合防災訓練	9月	・ 建物火災の消火, 建物崩壊からの救出訓練, 住民とともに避難所まで避難, 応急手当の指導 ・ 環境地図を掲示し避難時の危険箇所を説明	12名	約140名
健康教室 [足裏と足先を意識した健康生活]	翌年2月	・ 足の役割, 歩き方, 足の構造について講義 ・ 日々の足のケア, 靴の選び方, 履き方の講義と実践	2名	19名

表 3 活動によって得られた学習内容と住民への影響

活動	学生の学習内容	住民への影響
住民の健康状態の把握 地区踏査	・ 地域の避難物資の実際の備え	・ 笑い声が絶えない
調査報告と意見交換会	・ 住民の防災意識の高さを実感 ・ 住民同士の相互関係の深さ ・ 住民の加齢に伴う身体面への不安 ・ 看護の知識を使い自分たちが役立てないか	・ 学生の視点から見た危険な箇所に気づく ・ 日頃の健康意識を高くもって生活することの重要性 ・ いざというときの避難行動への不安 ・ 看護の知識を活かした支援を期待
健康教室 [歩幅を意識した生活]	・ 住民同士が工夫しながら互いに交流していく状況 ・ 住民個々が工夫しながら生活の維持・向上をしていること ・ 個々に提案できたことは、健康はもとより安心につながられる	・ 普段の健康づくりの大切さ
A地区自主防災会総合防災訓練	・ 高齢者の日々の健康づくりが、災害時の互いの支え合いになっていた ・ 実際に人を搬送する困難さ ・ 高齢者の方々が訓練する姿から若者として積極的に訓練に関わる必要性 ・ 限られた資源や二次災害を条件とした訓練が有事に役立つ ・ 傷病者が多い場合、トリアージの想定が広がる	・ 学生の視点から見た普段の危険な生活環境 ・ 家族間での防災についての会話 ・ 防災への取り組みで気づいた普段の健康づくりの大切さ
健康教室 [足裏と足先を意識した健康生活]	・ 足腰への関心が高い ・ 高齢者にとって自立した生活を維持するための足の話題はとても意味がある ・ 地域で健康教室を開催する意義 ・ 定期的に健康教室を提供することが重要である	・ 普段からの足の健康づくりの大切さ

住民の自宅を訪問し、アンケート用紙を用いた聞き取り調査（以下、インタビュー調査）を実施した（写真1）。訪問時不在の住民にはアンケート用紙に返送用封筒を添え、郵送を依頼した。

写真1 インタビュー調査



地区踏査はA地区を5分割し、担当する学生も5グループに分かれて行った。地区毎の調査を行いながら、高齢者等の生活環境の視点から、避難の際、地形的・環境的に危険だと感じた場所や内容を抽出し、付箋に書き出していった。付箋に書き出された場所は、A地区の地図に貼付し、環境地図として可視化した（写真2）。

写真2 環境地図



学生は、避難用品の準備状況について、インタビュー調査を通して、「避難に備えて避難用品は持ち出しやすいところに置いてあった」こと、「家々によって避難物資の備えの内容が異なる」ことに気づくことができた。地区踏査によって〈地域の避難物資の実際の備え〉について知る機会になった。このようなインタビューを受けた住民側の感想の一つとして、「話が盛り上がり、久々に笑い声が響いて嬉しかった」と《笑い声が絶えない》状況が話されていた。住民同士が集まり訪問予定の学生を待っている様子も見受けられ

た。
2) 災害から命を守るために必要な健康づくりに関する調査報告と意見交換会

学生は、インタビュー調査およびアンケートの結果をまとめ、住民に報告できるように準備を行った。報告の準備を行うにあたって留意した点は、資料やパネル作成の工夫であった。

調査報告は、同日の昼夜2回行い、その後、各回とも学生と住民との間で意見交換を行った（写真3）。

写真3 調査報告と意見交換会



調査報告後、住民は、居住地区の環境地図を見て《学生の視点から見た危険な箇所に気づく》ことができた。「日常的に生活している慣れになっているため、学生さんの新しい目で見ると、気づかない点を気づくことが出来た」等の感想が述べられた。また、自主防災会役員からは、住民以外が作成した資料として「今後、行政へ改善を提案するときの資料にもなる」と話されていた。さらに、意見交換では調査報告を受けて《日頃の健康意識を高くもって生活することの重要性》についての発言が見られた。しかし一方では、「足腰が弱り、いざという時に対応できるか自信がない」といったように《いざというときの避難行動への不安》も認められた。「看護の知識を生かした具体的なサポートがほしい」と《看護の知識を活かした支援を期待》する意見もみられた（八百板，2019a；三浦，2019）。

学生は、今回のインタビュー調査を通して、〈住民の防災意識の高さを実感〉していた。また、意見交換では〈住民同士の相互関

係の深さ) を実感したり、(住民の加齢に伴う身体面への不安) をもって生活していることに気づく事もできた。このような学生の体験は、「看護の面から災害時に役立つアドバイスができれば」(藤田, 2019) と(看護の知識を使い自分たちが役立てないか) という地域に対する役割の認識を高めることに繋がり、これは看護としての地域貢献への第一歩と考える。

3) 足腰の弱りへの不安に着目した健康教室の実施

調査結果や意見交換会を踏まえて、いざというときの体力と健康維持を目的に、学生は健康教室を開催した。健康教室は、美浜町で行われている青空喫茶というイベントに参加する形で行った。健康教室では、意見交換会で出された足腰の弱りへの不安に着目し、日頃の生活の中で歩幅を意識した歩行のしかた(歩幅を意識した生活)を提案した。学生はイベントに来場した住民に対し普段の歩幅の測定をし、住民へ歩幅を広げた歩行の方法を説明した。そして、歩幅の広い歩行を実際に体験してもらうことで、生活の中で意識的に取り入れていけるよう配慮した(写真

4)。

写真4 健康教室



住民からも「日頃からの健康づくりや準備をしながら、いざという時に行動できるようにしていきたい」と話し《普段の健康づくりの大切さ》に気づいた。

学生は、地域のイベントに参加したこと

で(住民同士が工夫しながら互いに交流していく状況)も体験できた。住民へ個別に説明する中で、(住民個々が工夫しながら生活の維持・向上をしていること)への気づきがあり、(個々に提案できたことは、健康はもとより安心につながられる)と実感していた。

4) A地区自主防災会総合防災訓練への協力

A地区自主防災会総合防災訓練(以下、防災訓練)は、大雨による土砂災害や震度6弱の地震、火災などが発生したときに看護大学生が居合わせた想定で行われ、学生も参加した(写真5)。

写真5 A地区自主防災会総合防災訓練



また、防災訓練には、調査報告および意見交換会に来られなかった住民も多く参加しており、防災訓練終了後の昼食時に調査報告と環境地図のパネル掲示も行った。

学生の目を通して作成された環境地図は、住民が《学生の視点から見た普段の危険な生活環境》について知るだけでなく、《家族間での防災についての会話》のきっかけを提供したり、《防災への取り組みで気づいた普段の健康づくりの大切さ》への気づきにつながる機会となっていた。

また、学生は多くの住民と共に行動することで(高齢者の日々の健康づくりが、災害時の互いの支え合いになっていた)ことを実感し、(実際に人を搬送する困難さ)を体験する機会になっていた。それらの経験を通して学生は、(高齢者の方々が訓練する姿から若者として積極的に訓練に関わる必要性)を実感していた。また、「公助が機能しない場合に住民自身が対策できることを想定すること

が大切だ」(八百板, 2019b) 等と感想を述べ、〈限られた資源や二次災害を条件とした訓練が有事に役立つ〉や、〈傷病者が多い場合、トリアージの想定が広がる〉といった学びがあり、今後の防災訓練のあり方へ考えを深めていた。

5) 日頃の生活の中で足裏と足先を意識するために行った健康教室の実施

足腰の健康への不安に対し行った第1回目の“歩幅を意識した生活”から、第2回目の健康教室では“足裏と足先を意識した健康生活”を行った。第2回目の対象が高齢者であったため、本学の老年看護学教授を講師に招いた。A地区住民に広報し、健康教室では講演のみでなく、住民同士が互いに交流できるように工夫した。学生は、講師の講義に合わせて住民の足を一緒に確認したり、説明の補助をしたりしていた(写真6)。

写真6 健康教室



住民は、「老いても足腰元気で暮らすためには一番重要なお話だった」や「日頃、足のことを特別に感じたことがなかったので大切にしたい」と話し、《普段からの足の健康づくりの大切さ》への気づきとなった。

学生は、住民個々が身体を動かし確かめている真剣な姿から〈足腰への関心が高い〉ことを実感していた。その実感から、〈高齢者にとって自立した生活を維持するための足の話題はとても意味がある〉と考え、〈地域で健康教室を開催する意義〉や〈定期的に健康教室を提供することが重要である〉との考えを深めていた。

IV 考察

1. インタビュー調査や地区踏査、健康教室など(以下、フィールドワーク)の教育的効果

教育効果を検討するために、複数の教員間で討議し検討した。

学生にとってフィールドワークの教育的効果は、住民と直接交流する体験により看護の対象である人への関心を深め、主体性を発揮したことである。

学生が行ったフィールドワークは、常時、住民と交流があるものだった。インタビュー調査では、住民と対話して、それぞれの家庭によって避難物資の備えが違うことに気づいていた。意見交換会では、住民の防災意識の高さを実感したり、住民が身体面への不安をもって生活していたりしたことから、地域の強みと課題にも気づいた。そこから学生は、「対話を通じて災害時に役立つアドバイスができれば」と自分たちが看護の知識を使い役立てたいと住民に関心を寄せはじめた。その関心を基に、健康教室を実施したり防災訓練に協力したりすることにより、住民個々の安心や健康につながられるようになった。学生が役割を果たせたことに達成感を感じていた。また、その体験を通じ、健康に関する知識は定期的に提供することが重要であると、今後の取り組みの必要性にも気づいた。

学生の気づきは、住民と対話するたびに発展的に変化するとともに、自分たちの力を発揮したいという希望へも繋がっていった。これは、フィールドワークでの住民との交流で、住民へ関心を持ったことにより、学生の主体性が導かれたともいえる。水野(2013)は「講義室での授業は、知識や理論を学ぶことができるが、現実の社会問題と向き合ったときに、実際にどう解決していくべきかを教えてはくれない」と述べている。大学内の講義と異なるフィールドワークで、学生は地域

の課題や住民の不安と向き合った。看護の知識を生かしてほしいとの希望にも応えるため、実際に解決する方法を模索し、実施した。課題を捉え、解決を模索し住民と交流を続けることで、人への関心を深め、課題解決のための考えを進めたことで、主体性が発揮されたと考えられる。

2. 地域への影響

我々が“地域との連携”を取り入れたのは、学生に地域で生活する方の健康や生活環境、また、生活と健康の関係等を理解し、地域における健康課題を解決していく能力を身に付けさせたいという教育上のねらいがあったからである。その他にも、学生と幅広い年代の方々とのコミュニケーション力の育成も意図していた。また、地域からも、「若い学生に地域に来て活動してほしい」「若者が町にいと明るくなる」といった要望があった。そのため、本活動は、大学の教育上の目的と、地域の活性化を図りたいという思いが合致したため実践することができた。そこで、学生のフィールドワークが地域へどのような影響を及ぼしたかについて考察する。

フィールドワークを行うことによって、住民に対しては、大きく3つの影響が考えられた。

一つ目は、「学生と話が盛り上がり、久々に笑い声が響いて嬉しかった」や玄関で学生が来るのを待つ住民がいる等、住民同士が集まり学生を出迎えた様子があった。学生が受け入れられていることの安心感から、住民とよい関係のもと対話が進められた結果と考えた。

二つ目は、学生が地区踏査を基に作成した環境地図により、日常とは異なる視点で普段は気づけなかった生活環境の危険を知り、それを基にした家族間で防災についての会話の機会になったり、普段からの健康づくりの大切さの気づきにつながった。また、「地域を詳細に捉えてくれた貴重な資料」とし、

「今後、行政へ改善を提案するときの資料にもなる」という感想からも、地域に活用される資料となった。

三つ目は、意見交換会において、住民はいざというときの避難行動への不安に気づき、看護の知識を活かした学生からの支援を期待した。実際に、学生は健康教室を開催したり、防災訓練への協力を行った。住民は、防災への取り組みで普段の健康づくりの大切さに気づき、健康教室を通して普段からの足の健康づくりの大切さを実感するに至った。

この活動を通して住民に及ぼした3つの影響は、学生と住民が1年かけて調査、報告会、意見交換会、課題に基づく教室等の実施まで継続的に交流できたことで生まれたものである。初澤（2017）は、大学と地域の連携活動について、「学生の参加は学生のまちづくり事業への関心を高め、（中略）今後もまちづくり活動に関わっていこうという意識をもたせることにつながる」と述べている。学生は、地域に快く受け入れられたことにより、身をもって高齢者が多い地域であることを理解し、実際の搬送訓練は大変であることを知った。その結果、若者として積極的に訓練に関わる必要性を実感することができた。

また、学生は、限られた資源や二次災害を想定した訓練が有事に役立つことや、健康に関する知識は定期的に提供することが重要であると実感し、今後も地域活動に継続して関わることの重要性にも気づくことができた。

このように、学生は若者として地域の高齢者と相対した体験から、地域貢献や若者としての社会的役割を自覚することができた。その一方、住民が継続的に学生を受け入れてくれたことも学生の「やる気」を刺激していると考えられる。受け入れられていることで学生は安心し、住民個々へ関心を向けることができた。活動を通して感じた住民の明るさは、今後の防災と健康に関心を持つ契機となったのではないかと考える。

V 結論

今回の、災害に対する住民の“健康で安全かつ安心な暮らし”を考え実践する活動から得られたフィールドワークの効果と考察は、以下の通りであった。

1. 学生と住民が直接交流する体験により、学生は看護の対象である人への関心を深められたと示唆された。
2. 住民への関心を持つことで、学生の主体性が導かれた。
3. 学生が自分自身を客観視し、地域貢献や若者としての社会的意義を自覚できた。
4. 地域住民の明るさを感じ、防災と健康への関心を持つ契機となった。

謝辞

今回、美浜町協働プロジェクトを実施するにあたり、美浜町長、副町長をはじめ、美浜町健康づくり課、A地区長および役員の皆様、住民の皆様に厚く感謝申し上げます。

利益相反

福井県「県内大学の地域人材育成支援事業」の支援を受けた。

文献

- 藤田有美. (2019年7月3日). 町民の「防災」健康通じ支援. 福井新聞, p.24.
- 福井県 (2017). 平成27年国勢調査福井県独自集計 (人口等基本集計分). (2020年5月24日, <https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/toukei-jouhou/kokutyuu/2015kokusei-dokugi1.html>)
- 初澤敏生 (2017). まちづくり事業に大学が参加する意義: 福島県会津地域および福島県石川町での実践から. 季刊地理学,

69, 3-18.

一般社団法人公立大学協会 (n.d.). 公立大学の力を活かした地域活性化研究会.

(2020年6月10日, <http://www.kodaikyo.org/?cat=34>)

三浦孝仁. (2019年8月6日). 災害に備え高齢者ら支援 美浜町で健康相談や講座計画. 読売新聞, p.25.

水野晶夫 (2013). 「地域が学生を育て、学生が地域を元気にする」地域連携活動の試み: 名古屋学院大学の事例から (特集 地域連携による教育の取り組み). 大学教育と情報, 143 (2), 12-15.

内閣府地方創生推進事務局 (n.d.). 地域活性化プラットフォーム. (2020年6月10日, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/platform/index.html>)

総務省 (n.d.). 「域学連携」地域づくり活動. (2020年5月24日, https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/gyousei/ikigakurenkei.html)

八百板一平. (2019年8月17日). 避難に備え健康づくり 看護大と美浜町 住民から聞き取り. 朝日新聞, p.27.

八百板一平. (2019年9月10日). 美浜で防災訓練に150人 敦賀市立看護大学生も参加. 朝日新聞, p.26.

(受付日: 2020年6月16日)

(受理日: 2020年8月5日)